THE JOMO SHINBUN　2001年（平成13年）7月1日（日曜日）（日刊）

上毛新聞
発行所（〒371-8666）前橋市古市町11-50-21
上毛新聞社
電話 市外局番（027）
（編集）251-9933（広告）251-9944
（販売）251-9131（事業）251-9966
（印刷）251-9955（出版）251-9966
（ファクス）251-9936（受信）251-9984
（総務）251-9917（総合）251-9911

© 上毛新聞社 2001年

まちむら語る

脱過疎へ幹線道路整備

上野村　黒沢　丈夫村長（87）

■出発点は「やまびこ荘」

豊かな自然に囲まれた上野村北西部に、第三セクターの上野振興公社が運営する国民宿舎「やまびこ荘」がある。建設されたのは一九八八年。村長となって初めて手がけた大型事業であり、「過疎からの脱却」のための農業おこしの出発点とする特別な施設だ。

「農林業だけに頼っていたのでは、若者を住ませられない」と計画を立ち上げたものの、先立つものがない。建設資金の調達を求め地方課に相談に行くのは一九八六年。村長となって、「名所旧跡もなく、温泉も出ない。しかも県下一番遠い」と言われた大変な作業だった。

「過疎問題の根は深く、容易に解決の糸口は見つからない。「日本はそろそろ、都会に住むことが手せであるという価値観も見直すべきではないか」。五月の村長選で十二回目の当選を決めた山村振興のリーダーは、便利さや合理性ばかりを求める現代人の心のあり方にも警鐘を鳴らす。

「私たちでもんなことはわかっている。ただ、不安があってなかなか踏ん切りを出すべき、思いとどまるよう説得された。

「県の担当者は「そこまで考えているのなら」と理解してくれた。いくつかの効果を言い、効き目のあり方はどうか。そのうえで万策尽きたのならば仕方ない。何をしてもだめだったらどうするか。借金してでも持ち堪えてくれる。そこまで言われたのならば仕方ない。」と反対しない。

ここで県の人にこう言った。もし家を打たずに、村が滅びるのを待っていたのでは、村長として無責任過ぎる。

村は今、人口急減病と高齢化という悪性の病気で危篤直前の状態です。もしあなたの子どもが危篤だったらどうするか。借金してでも治療費を出すでしょう。

高齢者集会住宅、山村留学制度、交流施設整備など、全国の自治体のモデルケースとなった数々の上野村独自の施策を、「実現していれば村は滅びるという切実な思いが原動力となった。

上野村にはまれ、「自然豊かな上野村に生まれ、自然の中で育ってきた。日刊富岡中学から福島医学校へ進学。第二次世界大戦では特攻隊員として「何度も死ぬ目にあった」。終戦後、上野村に帰農した。

誇れる助け合いの心

シイタケ栽培を中心とした林業を続けるなか、過疎の進行は、村の人口が減少し、人口が増えるのもつ価値を実感する。

「社会づくりは、人と人が助け合い、協力しあってつくるもの。農山村は、直接的な助け合い、協力の中で、それぞれに育ってきた。

「人間関係は、「そこに住むのは、多少の金もうは犠牲にして豊かに暮らしていれば、自然と人と社会が助けてくれるもの。私はそう思う。

「社会づくりは、